

自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、
集団参加の基盤を培う授業実践

1

本実践に関連する児童生徒の実態

対象 中学生

- 課題
 - ・注意力が持続しにくく、集中できる時とできない時の差が大きい。
 - ・相手の視点に立ち、相手の気持ちを理解することが苦手である。
- 強み
 - ・係活動など任せられた仕事は責任を持って行うことができる。
 - ・体育の授業に、意欲的に参加することができる。

2

指導目標・指導仮説

教科等及び単元（題材）名
保健体育科「バスケットボール」
自立活動「自他の理解を深め、対人関係を円滑にする」

目標（本実践終了時の期待する生徒の姿）
バスケットボールの授業で、自分からチームメイトを励ましたり、認めたりする声かけができる。

指導仮説
・仲間の様子を観察し、記録を残していけば、他者理解につながり、ゲーム中や話し合いの際、コミュニケーションをとりやすくなるであろう。

児童生徒の実態

3

指導仮説の具体的な内容と評価内容・方法

◆指導仮説の具体的な内容

・クラス全員と関わる機会を授業の中で意図的に設定し、競技中、仲間のこんなプレーには、こんな声かけをしようと具体的な事前指導を行う。ゲーム中は、仲間の様子を細かく見学、記録させ、作戦タイムやゲーム、振り返りの際に仲間のプレーに対して、肯定的評価や励ましの声かけができるようにする。

◆評価方法（どのような方法で何を評価するか）

作戦タイムやゲーム、振り返りの場面で、チームメイトのプレーについて、肯定的な声かけができていたか。
（行動観察や振り返りの記述内容）

4

指導の実際①

Aくんが記録しやすいように、項目をまとめるなどの工夫した記録用紙を作成した。その様式と同じものを使用して、クラス全員がお互いの頑張っている様子に着目するよう学級全体を指導した。



他者理解

5

指導の実際②

生徒同士が、クラス全員と関わるために、チーム編成は1時間ごとに変えた。また、事前に、学級全体の参考となるような肯定的評価を生徒全員に紹介し、参考にしよう指導した。



場の設定

6

指導の実際③

ゲーム前の作戦タイムではディフェンス中心かオフェンス中心かを決め、どのようなプレーをすべきか自分の役割を明確にした上でプレーさせた。そのことを中心に作戦タイムやゲーム後の振り返りで相互評価させた。



自己理解

指導の実際④

振り返りは、チーム→個人の流れで行った。チームでの振り返りでは、できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。また、Aくんにも、事前指導しておいた項目について、仲間を評価するよう指導した。仲間からの肯定的評価を受けた後に自己評価を行わせた。成果に関する記述には下線を引き、目につきやすいようにした。

項目	内容・結果	振り返り
1 試合前の準備・作戦タイム	ディフェンス中心かオフェンス中心かを決め、どのようなプレーをすべきか自分の役割を明確にした上でプレーさせた。	できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。
2 試合中のプレー	ディフェンス中心かオフェンス中心かを決め、どのようなプレーをすべきか自分の役割を明確にした上でプレーさせた。	できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。
3 試合後の振り返り	チームでの振り返りでは、できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。	できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。

項目	内容・結果	振り返り
4 チームでの振り返り	できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。	できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。
5 個人での振り返り	できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。	できたところを中心に話し合いを進め、生徒同士の肯定的評価が増えていくよう指導した。

次時へつなげる

実践前後での児童生徒の変容

実践前	実践後
<ul style="list-style-type: none"> 仲間と積極的に関わり、楽しくバスケットボールがしたいという気持ちはあるが、うまく関わっていくことができなかった。 思ったことを独り言のように呟いたりすることが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> 練習の際は、観察・記録など決められた仕事をやりきることができ、仲間と積極的に関わる姿が見られた。 作戦タイムや振り返りの場面では、自分の意見を表現しようとするが、なかなか自分の言葉として自らの考えを言うことは見られなかった。但し、メンバーに促されると「いいと思う」「わかった」などの返答をするようになっていった。

評価

- 児童生徒は目標を達成したか。
達成した。
- 判断の理由・根拠
 - ・「授業の中で、自分からチームメイトを励ましたり、認めたりする声かけができる。」という目標が十分に達成できたとは言えない。但し、相手の気持ちを理解することが苦手なAくんが、相手の行動をしっかりと見て、記録し、それを他者とのコミュニケーションのツールにできるという学びはできた。
 - ・周りを意識しながら記録をとったり、仲間の活動をしっかりと観察しようとする活動は見られた。また、促されれば、自分なりの表現で、自分の考えたことを仲間に伝えようとする姿が見られるようになった。

指導仮説の検証

- 指導の成果

実践前は、自己評価の際「チームで協力して活動できた」という項目にCをつけることが多かったが、本実践ではAをつけることができた。授業の後半になると「チームプレーがほくだけ一切できない」といった自分自身に対する評価が授業の反省の中に書かれるようになってきており、集団の中での自分の立ち位置を考えるようになってきた。
- 課題

自分自身や仲間に対しても、ミスやできなかったことを意識しすぎるところがあった。肯定的な声をかけるためには、良いプレーや発言を繰り返し評価していくことが必要であった。

指導の改善案

- 成果・課題を踏まえた改善案

8時間のバスケットボールの授業実践で、他者の行動について、具体的に何を観察し、まとめ、それを相手にわかりやすく伝えていくことができるかを学ぶ糸口になったと考える。

自分の考えをうまく相手に伝えていくのかといった学習を今後重ねていけば、対人関係を築き、深い、集団生活に溶け込んでいく意欲とスキルを身に付けていくことができると考える。

生徒の活動の様子を、ビデオ等で録画し、自身の言動を客観的に振り返らせる。